

Dating of the Former Head Office Building of Nishimoto-gumi and Analysis of the Plan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 直子, 西本, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/302

旧西本組本社ビルの建造年代と平面の分析

Dating of the Former Head Office Building of Nishimoto-gumi and Analysis of the Plan

西 本 直 子*
Naoko Nishimoto

西 本 真 一*
Shinichi Nishimoto

要旨

史料の渉猟によって、これまで言われてきた旧西本組本社ビルの創建年代が大正末期に遡ることを示した。またこの建物が第二次世界大戦の和歌山空襲によって多大な被害を被りながらも全壊は免れ、コンクリート造の躯体は残されたことを論述する。さらに実測結果をもとにして、平面に関する計画寸法の分析をおこなった。

1、前言

登録有形文化財に指定されている和歌山市の旧西本組ビル（平成12〔2000〕年指定、第30-0042号）¹については、これまで建造年代が昭和2（1927）年頃と考えられてきたが、これより遡ることを示す史料の存在が判明した²。本稿では当該史料とともに、設計者・岩井信一が設計図を作成した当時の状況を勘案し、改めて大正時代の建物としての考察を試みるとともに、戦災の被害状況に触れ（図1～5）、またその後の上げ下げ窓の改修について明らかにする。旧西

- 1 「月刊文化財」454号（2001年）、pp. 40-41；西本真一・西本直子「旧西本組本社ビル」、武蔵野大学環境研究所紀要第2号（平成25〔2013〕年）、pp. 95-104 (http://issuu.com/naokonishimoto/docs/musashino2013_nb)。なお、焼け残った同ビルについては日本建築学会編「総覧日本の建築」第6-Ⅱ巻：奈良・和歌山、新建築社（平成14〔2002〕年）、pp. 254に「昭和20年（1945）7月の大空襲で、和歌山市内は焼け野原となった。建物が全くない小野町一帯で、西本組のビルだけが建っていた」という記述が見られる。
- 2 西本直子「旧西本組本社ビルの建造年代」日本建築学会2013年大会学術講演梗概集F分冊、pp. 921-922。
- 3 和歌山で大正13年に創刊された薄手の冊子である。写真の多用が大きな特徴であり、記事内容も政治から文化まで多岐にわたる。良家の令嬢の写真紹介ページも設けられており、当時は人気の刊行物であったと想像される。出版は和歌山社会画報社で、また印刷は大正写真工芸所であった。この会社は観光絵はがきなどの印刷で知られているが、優秀な印刷技術を確立していたが故に、後には軍部に利用されていく。大正写真工芸所については太田宏一「大正写真工芸所について」和歌山市立博物館研究紀要24（2010年）、pp. 13-27を参照。

*環境学部非常勤講師



図1：和歌山市の大空襲直後に丸正屋上から撮影された和歌山市内のパノラマ写真
(毎日新聞社提供。旧西本組本社ビルを矢印で示す)

本組本社ビルは2000年より再利用計画をおこなっており、建物内外の姿を大きく損なわない限り、いくらかの改修を認めているが、常に改変の記録を作成することが肝要であろう。同時に過去の変更箇所に関しても、可能な限り詳細を把握しておくことが望まれる。

2、「社会画報」第15号特別号の写真

「社会画報」第15号特別号（大正14〔1925〕年10月1日刊行）³の写真（図6）から、少なく



図2：大空襲時のビル（図1、矢印部分の拡大）

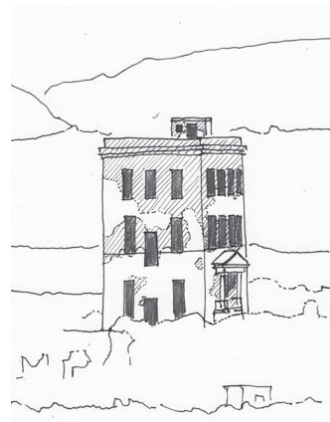


図3：毎日新聞社撮影写真、
部分拡大スケッチ



図4：丸正百貨店（大きい四角）から旧西本組本社ビルの方角を示す（インターネットにより公開されている国土交通省、国土画像情報：和歌山市小野町における昭和49〔1974〕年度撮影のカラー空中写真をもとに加工。http://w3land.mlit.go.jp/Air/photo400/74/ckk-74-9/c20/ckk-74-9_c20_5.jpg。閲覧日：平成25〔2013〕年10月31日）。



図5：和歌山市駅からの西本組本社ビル遠望。
昭和29年9月以前
（和歌山市立博物館蔵）

とも以下の諸点が指摘される。

- ・ビルの東側には西本健次郎の本宅があり、ビルの1～2階と繋がっていたと言われていたが、確かにその位置に木造平入の家屋が確認される。ビルとの境界には小壁が建てられていたようである。
- ・西側駐車場と木造の隣家との境には、今でも現存するレンガ造の壁がうかがわれる。
- ・現在、西面にある2層のトイレ設備は見られないため、これが後補であることが確認される。
- ・北面に現存する木戸が写真でも確認されるほか、今日では開口部のみとなっている駐車場出入口に、もともと鋼製グリル門扉とブラケット灯が設けられていたことが判る。主要出入口前のベディメントにもブラケット灯が設置されていたことも判明した。
- ・窓の棧が現状とは異なっており、戦災によって大きな被害を受けた後に改変された点が推測される。

3、窓

第二次大戦の空襲によって和歌山市は焼け野原となり、ほとんどの建物が消失した。毎日新聞社によって昭和20(1945)年10月に撮影されたパノラマ写真(図1～4)は丸正百貨店の屋上から撮られたものであり、和歌山市駅から遠望された写真(図5)とともに、当時の状況を知る上で貴重な画像史料である。ここには焼け残って孤立した旧西本組本社ビルが小さく写っており(図2～5)、丸正百貨店と旧西本組本社ビルとの位置関係(図4)を考えるならば、写真は当ビルの北面と東面とを示していると考えられる。写真を拡大してみる際、開口部が焼けただれた痕跡が明瞭であって、特に2階の東面窓周辺の壁は黒く変色した跡が甚だしい。建物の木部は大部分が損なわれたものの、コンクリートの躯体と石造の玄関部は焼失を免れたとみなすことができよう。当時はビルの2階に社長室があり、東面中央の開口から伸びる廊下によって母屋と繋がっていたと伝えられていた⁴。それを明証する東面の2階の開口部が写真で確認することができる。2階東面の開口は現在2箇所見られるが、写真では3箇所認められ、中央開口のみ、高さがずれていることが了解される。ここが2階に設けられていた母屋との出入口であったと思われる。隣地にあったという木造の西本家の自宅はこの戦災によって、完全に失われたようである。

西本組は昭和17(1942)年に本店を東京に移したが、戦後の昭和21(1946)年に、三井建設となった。当該建物は当時、西本組和歌山支社事務所ビルとなっていたが、三井建設となった後は、二代目西本健次郎(健三改め)が開設した西本建設本社ビルとなった。健次郎は1866年に岐阜に生まれ、西本用助方に入って後継者となってから昭和22(1947)年、76才で亡くなるまで和歌山に在住した。しかし初代の健次郎は昭和20(1945)年の終戦の年、すでに74才であった。

従って、大正14年10月の「社会画報」に掲載されている旧西本組本社ビルに見られる窓枠の構成が、現在の木製サッシュの姿と異なっているのは戦災によって失われたためであり、建物は二代目の西本健次郎が再び建設会社本社ビルとするために復旧されたと推測される。

「社会画報」第15号に掲載されている写真に基づいて、窓の原型を判る範囲で復元した(図6)。

4 ビルの2階の東側に社長用机が置かれる他は、南面に沿って経理係の植村つね子氏の机が置かれていた。往時の西本健次郎は朝一番に、自宅から2階の社長室に出勤して書をしたため、植村氏が入れるお茶を飲むところから日課を始めたという。植村つね子氏からの聞き取りによる。

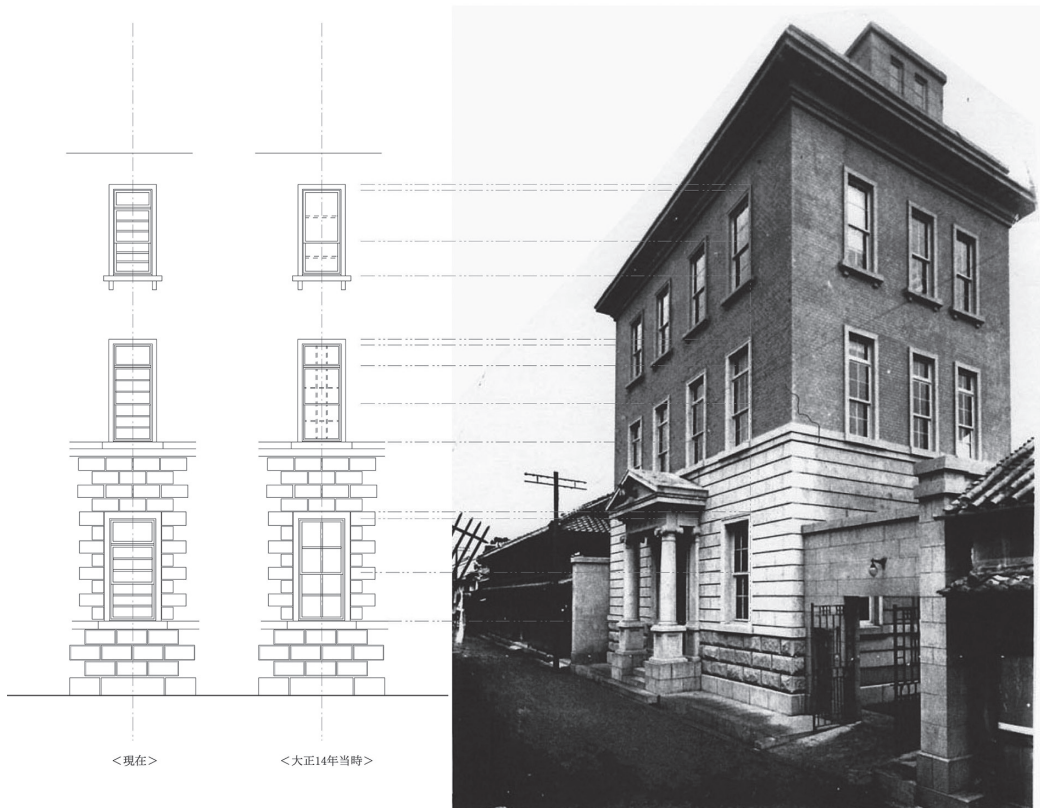


図6：窓建具枠の改変（和歌山県立図書館蔵、「社会画報」第15号特別号より）

開口高さは変わらないが、特に1階と3階は窓割りがすっかり異なり、また棧が室内側に設置されている。大きなガラス面を見せる外観は、横棧がガラスを区分する現意匠よりモダンな様相を呈していたことが了解される。1階から3階を通じて各層ごとに構成を微妙に違えながら、正方形を意識的に取入れた凝った意匠設計がなされていたと考えられる。

4、タイル

現存の外壁仕上げに関し、かつて木造家屋と接合していたと思われる東面、南面の一部、及び北東角の外壁仕上げが今は吹付タイルなどとなっているのも、戦災によって外壁タイル張りが傷んだ部位を補修したためと思われる⁵。このタイルは表面が平滑で、建物隅部には役物タイルが使用されている。馬目地（破れ目地）であるが、目地深さは大変浅い（図7～8）。タイルの厚みは不明である。外壁のクラックはそのままタイル上に現れている箇所が認められ、躯体との高い密着性がうかがわれる。

全体として、2階より上の外壁面タイル仕上げは平滑性を強調する意匠となっている点は特筆

5 タイル修復をおこなおうとしたが同じ製品がなく、特注をしなければ手に入らなかったと故・西本瑛一郎はかつて語っていた。西本瑛一郎氏からの聞き取りによる。

されよう。本計画は擬ルネサンス様式⁶であり、地上階の壁面を荒々しいルスティカ仕上げとし、順次上層へ行くに従って段階的に面の平滑性を表現するルネサンス様式における典型的な考え方を反映していると考えられる。この建物でスクラッチタイルが貼られていると誤記した紹介文が時折うかがわれるが、スクラッチタイルが用いられた証拠はこれまでのところ、まったく見つかってはいない。昭和13(1938)年竣工の和歌山県庁本館の外装タイルにも平滑なタイルの使用が見られ⁷、同じ設計者の計画による富山県庁本館の仕様との関連も興味深いが、フランク・ロイド・ライトの設計による帝国ホテル(大正12[1923]年)の影響を受けて流行したスクラッチタイルの使用が、和歌山で具体的にどのように展開されたのか、より詳しい研究が望まれる。



図7：外壁タイル
(縦61mm、横110mm。目地約5.5mm)



図8：旧西本組本社ビル北西角の見上げ

5、旧西本組本社ビルの平面計画

2000年、2003年、2008年⁸に筆者たちがおこなった実測調査結果を図9に纏めた⁹。

これまで、正面中央梁間が柱心々 4,550mmで15尺と思われる一方、他の数値が尺の整数倍に

6 拙稿「旧西本組本社ビル」武蔵野大学環境研究所紀要2号(平成25[2013]年)、pp. 95-104。

7 和歌山県建築士会「和歌山県庁本館 歴史と文化のラビリンス～迷宮～」(和歌山県建築士会、平成24[2012]年)、pp. 112-113。

8 2000年に1階の主要出入口周り、1階の小部屋、3階の大部屋を執筆者が実測し、また2001年には和歌山大学大学生による実測調査がなされた。また執筆者は2003年には3階の大部屋の壁面の平面的な寸法を実測した。2008年、再度3階室内の寸法、3階階段室の内法寸法、またパラペット高さ寸法を実測した。

9 窓枠寸法を実測の上、窓枠と外壁、内壁とのチリを実測した数値を差し引いた。

ならないことが疑問であった。当計画の外壁仕上げは地上から3階までにかけて外観上、3つに区分される。一番下は重厚な御影石によるルスティカ風石張り仕上げが施され、その上には成形された御影石張りが施され、さらに2階より上の最上部は滑らかなタイル貼り仕上げと言う具合に、ルネサンス様式の計画法を踏襲し、徐々に壁厚が薄く変化していく。壁厚は最下段ルスティカ仕上げ部において、外々寸法で約400mmと最も厚く、最上部タイル張り仕上げ壁面は外々260mm厚である。

そこで、外々260mm厚の外壁タイル張り面外面を基準として平面図を改めて見直したところ、図9のように基準線の間隔が尺の整数倍となる点が判明した。これは1階から3階まで立ち上がる260mm厚外壁外面を基準として、2種類の石張り仕上げ厚を外側に付加すると言う考え方であり、施工上も合理性があるように思われる。中央梁間は外壁と絡まないの、主構造体である柱の心々で押さえられている。結果として、正背面基準線の間隔は東から3,335mm、4,550mm、3,320mmとなり、側面は正面から3,335mm、4,540mmとみなされた。全体平面形状は外壁外々で間口11,205mm、奥行き7,875mmである。これを尺¹⁰で換算すると、正背面柱間は東から11.00尺、15.02尺、10.95尺となり、側面の柱間は正面から11.00尺、14.98尺と解釈される。全体平面形状は間口37尺、奥行き26尺¹¹となり、尺の整数倍による計画方法がなされた可能性が強く示唆されよう。

拙稿で前述したように、岩井信一がおこなった平面計画はルネサンス様式を踏襲した単純な比例による構成で、縦：横 = $1 : \sqrt{2}$ の長方形を指向していると思われるのに、これまでは柱心などの実測数値が70mmなどずれていることが疑問点であった。しかし、尺で施工されたとなれば、このズレは $1 : \sqrt{2}$ の幾何学的な数値が尺に合わせて微調整された結果、生まれたと考えることもできよう。図9に示すように外壁外々寸法を基準とすると、奥行き：間口 = $1 : \sqrt{2}$ と考えることができ、3階の大きな部屋は壁の厚み分のズレが生まれるために内部空間の平面形状は正確な正方形とはならないが、大部屋と階段室を区画する通り芯と260mm厚外壁外面との関係は正方形を意図した計画であると考えられることができる。

10 明治時代に定められた1尺 = 10 / 33 m = 0.30303m = 303.03mmを適用する。

11 計算上は間口36.97尺、奥行き25.98尺となる。実測は見通しの効く3階で行われた。9mm、6mmは建築の誤差の範囲内と考えられる。

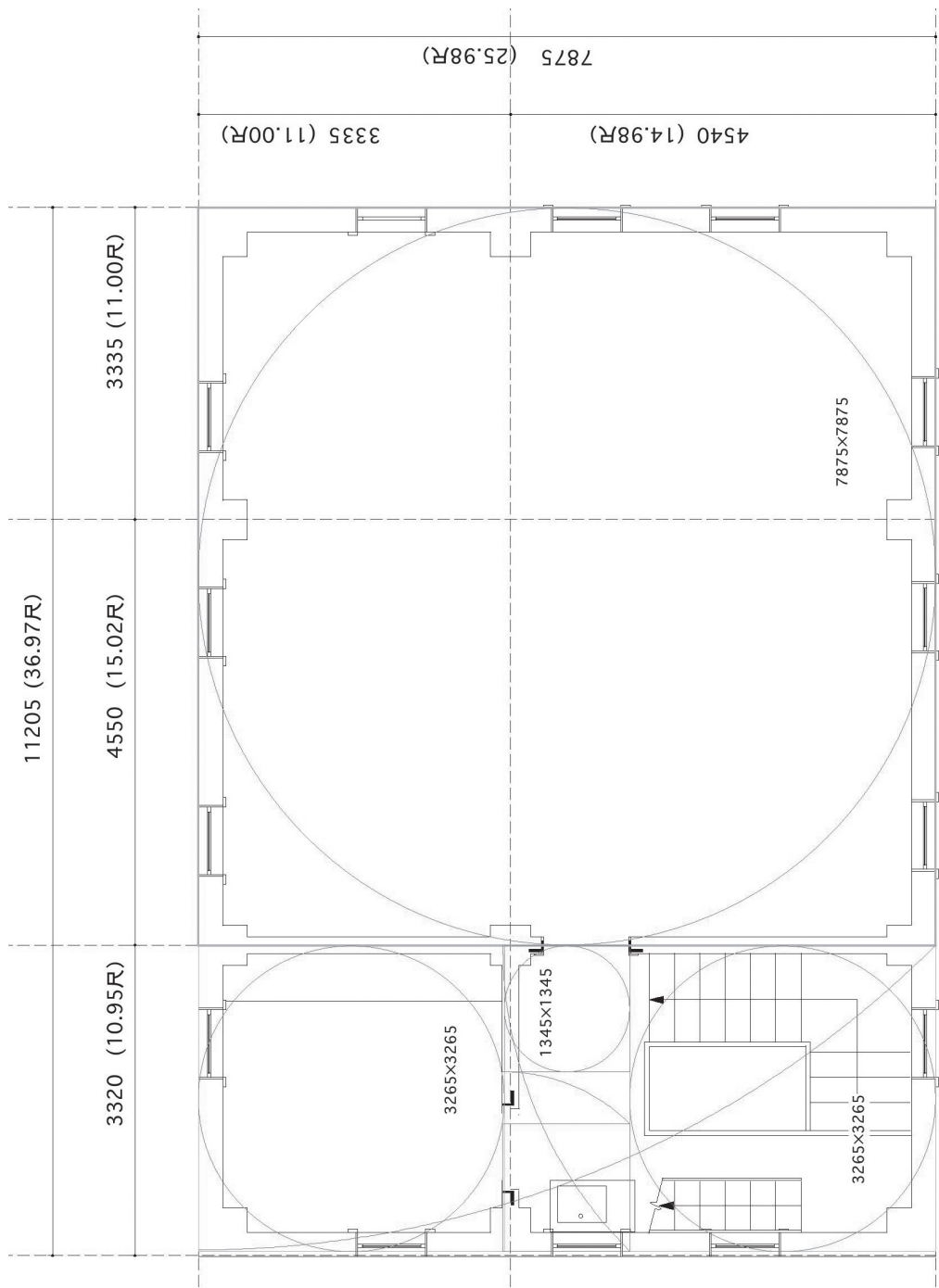


図9：旧西本組本社ビル、3階平面分析図

6、設計者・岩井信一の卒業写真

本計画は岩井信一（いわい・のぶかず）の卒業設計と伝えられ、大正11（1922）年12月発行の早稲田建築学報に掲載されている卒業写真に岩井信一とともに内藤多仲、岡田信一郎の姿があることは当該建築の計画を考える上で重要と思われる（図10～11）¹²。岡田信一郎（1883～1932）¹³が様式建築の意匠設計で秀でた才能を発揮していたことは有名である。また内藤多仲は当時、佐野利器と共に日本に相応しい鉄筋コンクリート造設計法を確立しようとしていた先駆者の一人であった。

鉄筋コンクリートは大正初年に実用化を果たしたが、我が国ではさらに耐震性能を有した構造計画法を求めて、その後1915年から1930年代にかけて内藤や佐野利器らが奮闘した¹⁴。1922年はその最中で、内藤が「架構建築耐震構造論」と題する論文を発表した特別な年ともなっている¹⁵。大正10（1921）年、建築家・渡辺節¹⁶の依頼で8階建てRC造の日本興業銀行ビルの構造設計をおこなったのが内藤の処女作であった。当時、アメリカ式の設計法ではなく耐震性を増した粘り強い構造物を造るために工夫した内藤の工法は、手間がかかり、経済面で不利であったため、採用にあたっては苦労が絶えなかったことを伝える内藤の発言内容が残っている¹⁷。早稲田建築学報1号の目次（図12）を詳しく見れば、廣瀬恭「鉄筋コンクリート梁スターラップ計算図表」、同付図、続いて村越安吉「鉄筋コンクリート穀倉設計」、同付図、といった項目が掲載されており、当時のRC造構造開拓時代の状況が良く伝えられている。

和歌山市内に残る大正期の鉄筋コンクリート造としては、大正10（1921）年の滋野医院や大正15（1926）年の真砂浄水場がある¹⁸。滋野医院などを見れば西洋の歴史主義的意匠から、より近代的な意匠に移行し始めていることが看取される。岩井が擬ルネサンス様式を取り入れた意匠を、こうした作品を背景として考えるべきかもしれない。

一方で西本組は明治期から土木業として避けがたく鉄筋コンクリート工法に創成期から関わっていた¹⁹。西本組が鉄道工事に参入するために危険を顧みず工事に挑戦して行くことで名を成し

12 早稲田建築第1号、早苗会、大正11（1922）年12月28日発行。

13 明治生命館など歴史的様式を用いた鉄筋コンクリート造に秀でた意匠を残した設計者である。

14 村松貞次郎「鉄筋コンクリート構造の歴史（第2回）—RC建築の発達—」コンクリート・ジャーナル Vol.6, No.11（昭和43〔1968〕年）、p. 44。濃尾地震以降、日本国内では佐野利器をはじめとして構造計画家は鉄筋コンクリート構造において海外の方法を流用するのは不十分として、耐震性能を考慮した構造計画の確立に腐心していたが、大正4（1915）年頃から佐野を筆頭に内田祥三・内藤多仲・土居松市らの先駆者たちによりRC床版・梁などの計算図表が次々と発表されていた。昭和4（1929）年に建築学会から「コンクリート及び鉄筋コンクリート標準仕様書案」が、昭和8（1933）年に建築学会から「鉄筋コンクリート構造計算基準案」が出されて構造技術としての一応の確立を見る。

15 大橋雄二「日本建築構造基準変遷史」財団法人日本建築センター、平成5〔1993〕年、p. 118。

16 渡辺節は関西を中心に活躍した建築家であるが、和歌山県では昭和11年には渡辺設計の和歌山市役所が竣工している。また、昭和13年竣工の和歌山県庁改築工事の準備と基本設計をおこなった和歌山県営繕技師・松田茂樹氏は元・渡辺節建築事務所所員であった。和歌山県建築士会「和歌山県庁本館：歴史と文化のラビリンス～迷宮～」（和歌山県建築士会、平成24〔2012〕年）、pp. 22, 62。

17 大橋雄二「日本建築構造基準変遷史」財団法人日本建築センター、平成5〔1993〕年、pp. 118-121。

18 和歌山県建築士会「和歌山県庁本館：歴史と文化のラビリンス～迷宮～」（和歌山県建築士会、平成24〔2012〕年）、p. 28。

19 鉄道工事に参入し、京都でも琵琶湖疏水工事で水をひくトンネルに関わるなどしている。

20 三井建設㈱社史編纂室「三井建設社史」三井建設株式会社（平成5〔1993〕年）、pp. 2-44。

たことは知られている²⁰が、トンネルを掘削し、橋梁を架構するために鉄筋コンクリート造の技術力は不可欠であったと思われる。また、日本における鉄筋コンクリート造建築への応用の早期の例として、村松貞次郎は明治38(1905)年頃に佐世保軍港内に、土木出身の海軍技師・真島健三郎²¹が建てたRC造建築2棟(1968年当時は現存していた)を挙げているのであるが、後の西本組東京支店長・小野鉄吉は1905年当時、西本組の所員として佐世保に居たことが判っている²²。現在はこの年号の符合を解く直接の糸はまだ見えないが、西本組は鉄道の仕事を得るために九州に工事範囲を広げ、後述のように軍の仕事が多かったことが思い出されるのである。また、岩井信一が大学に通うために東京・赤坂で身を寄せていたのが西本組東京支店長・小野鉄吉の家であったらしいことも前稿にて指摘した²³。大正末期は西本組の最盛期²⁴と言って過言ではない。岩井を支援して早稲田大学に行かせた西本健次郎の意図には、耐震性や防火性能の高さから新しい素材として建築界で注目され始め、急速に成長していた鉄筋コンクリート造建築の最新施工技術を知ることにあつたのではないだろうか。西本組の記録については大空襲にあつて焼けたものも多いが、蔵に残っていた重要書類等も鉄道など軍部の機密事項と関わる仕事が多かったために、記録を残すことが許されなかったと聞く²⁵。現在は現地で保管されていた図面に施工者名として残っているか、もしくは定礎などで確認される例などしかなく、元社員の口伝により判るばかりである。大正7(1918)年に、地下2階、地上2階建て、一部中2階、煉瓦造の旧和歌山水力電気(第二発電所)関西電力高津尾発電所²⁶を完成させていることも知られるところとなっており、京都でも宇治発電所を鹿島組の下請けとして施工している。建築工事をおこなう機会が徐々に増えていたと思われ、建築工事の技術を学ぶ必要性が高まっていたことが想像される。また健次郎については、煉瓦造工法をイギリスで直接学んで帰国後に試し積みをさせた逸話が残っているように、自ら学問を修めていなかっただけで一層、知識の取得に熱心な人であったと思われる。西本組本社ビルの建造にあたっては、当時、貴族院議員として全国でも地位を獲得していた健次郎が、小規模ながらも3階建てとして最先端の耐震性能を持つ鉄筋コンクリート造構法の習得を試み、最大の関心事となっていたであろう耐震性能を満足する高水準の建築の実現を目指して施工したと考えることができるのではないだろうか。

事実、判明しているところでは本社ビル建造の後、昭和4(1929)年にRC造3階建ての鳥羽小学校(三重)を、昭和8(1933)年に京都・清水小学校を築造している。早稲田大学在学中から、叔父の肝いりで実施を前提として西本組の技術力の看板ともなる本社ビルRC造計画を纏め上げねばならない使命を帯びていた岩井は、あるいは本計画を纏めるにあたって岡田と内藤の二人の教授に詳しく教を請うたかもしれない。

21 札幌農学校工科出身の構造学者。海軍省建築局長の時、柔剛論争で柔構造を支持する見解を出した。

22 小野鉄吉の長男、小野佐世男(1905～1954)の名前は鉄吉が佐世保にいた時に生まれたことに因んで命名された。佐世男は早稲田大学建築学科から東京芸大に入り直して後、漫画家となったが、学生時代にデザインした西本組の社章は会社が店を閉じる1990年代まで使われていた。

23 西本真一・西本直子「旧西本組本社ビル」、武蔵野大学環境研究所紀要第2号(平成25[2013]年)。

24 拙稿、「旧西本組本社ビルの建造年代について」日本建築学会2013年大会講演梗概集、pp. 921-922。

25 終戦目前に軍部が資料を持ち去ったと伝えられている。

26 和歌山県建築士会HP、「紀州近代化遺産巡り」(http://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/491.html)。

27 塩手博道、沢崎詠二、北島英樹、高島秀雄著「大正時代後期に建てられた歴史的建造物の解体調査および実大フレーム載荷実験 その1：解体部分における配筋調査およびこれにより推定される当時の設計方針」日本建築学会大会学術講演梗概集(平成21[2009]年)、p. 661。



図10：岩井信一の卒業写真。早稲田建築学報第1号（大正11年12月28日発刊。早稲田大学図書館蔵）より。

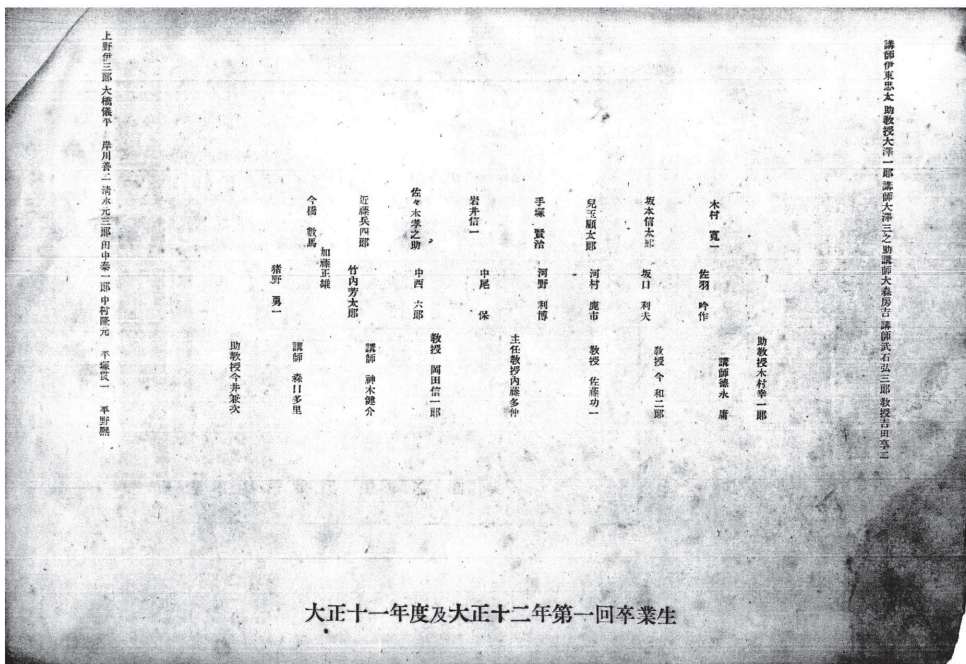


図11：内藤多仲、岡田信一郎ら、岩井信一の卒業写真に写った人名の一覧（早稲田大学図書館蔵）。

新卒業生記念寫眞

卒業設計圖

八葉

學生樣式圖

(七葉)

學生設計圖

(三葉)

對空襲住宅圖

(二) 葉山口巖

村上氏邸圖

(三) 葉) 岡田信一郎

西脇氏邸中門新築設計圖(二葉)岡田信一郎

△論說

建築と音響と (卒業論文) (一一三) 三宅 一雄

同
附圖
(二四—一七)

教會堂の設計
(卒業論文) (一八八)
山本 拙郎

裏千家の邸宅
(二九)
木村幸一郎

同 附圖 (三〇—三二)

鉄筋コンクリート梁

スターラップ計算圖表(一二三)廣瀬恭

同
附圖
(十一四)

鉄筋コンクリート穀倉設計(二一六)

村越 安吉

同 附圖 (1-13)

日本赤十字社参考館

鐵骨并鐵筋構造計算書(二—二〇)

内藤 多仲

同 附圖 (1-11)

大正十一年十二月二十五日印刷
大正十一年十二月二十八日發行

東京市神田區今川小路一丁目一番地

編輯兼
發行者
山內千秋

東京市京橋區入船町二丁目二番地

印刷者 鈴木巳代藏

東京市京橋區入船町二丁目二番地

印屬所 金木印屬所

發行所 早苗會

電話番町五三〇〇

– 128 –

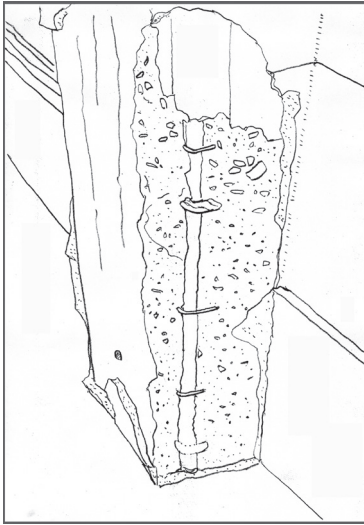


図13：室内側、柱仕上げモルタルと被りを一部除去。



図14：柱縦配筋の様子。一部フープ筋が見える。

1990年代に入り、内装の美装を実施した際に被りモルタルを一部取り去り、柱配筋が見える写真が残されていた。目測では、縦筋の径は20～25mmと思われる。帯筋が入られている点も興味深い（図12～13）。大正時代後期の鉄筋コンクリート造の例（東京都）では柱の帯筋太さが6mmで、200mmピッチとの記録がある²⁷。写真から起こしたスケッチに見られるように、西本組本社ビルの場合は帯筋太さに6mm程度と思われるものと、その倍程の太さの鉄筋が窓の腰あたりで廻っているものとの2種類が見られる。梁については、現在は情報が無い。1925年までに竣工した当該建物はまさに、日本の鉄筋コンクリート造構設計画法の過渡期において内藤がひとつの結論を纏めた時期にあり、その影響を色濃く受けた建築とも考えられる。今後、さらに非破壊方法などを用い、配筋の様子を詳しく知るための調査の機会を模索したい。

謝辞

本研究に当たり、図5の写真転載を御許可くださった和歌山市立博物館の太田宏一氏、また「社会画報」第15号の写真掲載を御許可くださった和歌山県立図書館に感謝申し上げます。「早稲田建築学報」第1号、及び「早苗会会誌」第8号における岩井信一の関連記事について、大変貴重な御教示をいただきました早稲田大学高等研究所の小岩正樹氏に厚く御礼申し上げます。また同誌の掲載を御許可くださった早稲田大学図書館、稲門建築会、並びに早稲田大学理工学部建築学教室に感謝申し上げます。最後に西本健次郎、及び旧西本組の聞き取りに関し、故・植村つね子氏に感謝申し上げますとともに、永きに亘る御厚情に心より御礼申し上げ、御冥福をお祈り申し上げます。

参考文献

- Mark Wilson Jones, *Principles of Roman Architecture* (Yale University Press: New Haven and London, 2000).
- Vaughan Hart and Peter Hicks, *Sebastiano Serlio: On Architecture*, 2 vols. (Yale University Press: New Haven and London, 1996-2001).
- Vitruvius, *On Architecture*, 2 vols. Loeb Classical Library 251, 280 (Harvard University Press: Cambridge, 1931-1934).
- 太田宏一「大正写真工芸所について」和歌山市立博物館研究紀要24(2010年)、pp. 13-27。
- 大橋雄二「日本建築構造基準変遷史」財団法人日本建築センター、平成5[1993]年。
- 小野佐世男展実行委員会・川崎市岡本太郎美術館「小野佐世男：モガ・オン・パレード」川崎市岡本太郎美術館(平成24[2012]年)。
- 河崎昌之「旧西本組本社ビルの保存と活用」、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要第21号(平成13[2001]年)、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、pp. 1-9。
- 早苗会「早苗会会誌」第8号、(大正10[1921]年12月25日)、早稲田大学理工学部建築学教室早苗会。
- 早苗会「早稲田建築学報」第1号(大正11[1922]年)、早稲田大学理工学部建築学科早苗会。
- 佐野輝久夫「歴史的ビルめぐり：旧西本組本社ビルを訪ねる」週刊ビル経営第826号20面(平成25[2013]年8月19日)。
- 塩手博道、沢崎詠二、北島英樹、高島秀雄著「大正時代後期に建てられた歴史的建造物の解体調査および実大フレーム載荷実験 その1：解体部分における配筋調査およびこれにより推定される当時の設計方針」、日本建築学会大会講演梗概集(平成21[2009]年)、pp. 661-662。
- 田中禎彦(写真：小野吉彦)「身近な歴史の再発見：登録文化財の建物から、第71回 旧西本組本社ビル」住宅建築第356号(平成16[2004]年11月)、建築思潮研究所、pp. 138-139。
- 谷奈々「旧西本組本社ビルと友ヶ島砲台跡」近畿産業考古学会ニューズレター第30号(平成20[2008]年5月)、近畿産業考古学会、p. 2。
- 谷奈々「近代化遺産：歴史的建造物の保存と活用」21世紀わかやま：和歌山社会経済研究所報第48号(平成18[2007]年)、財団法人和歌山社会経済研究所、pp. 31-35。
- 鶴田悦子「旧西本組本社ビル：関西美術探訪566」大阪日日新聞11面(平成25[2013]年9月10日)。
- 中西重裕「わかやまワクワク探検隊」わかやま新報社(平成14[2002]年)、pp. 26-27。
- 西本真一・西本直子「旧西本組本社ビル」、武蔵野大学環境研究所紀要第2号(平成25[2013]年)、pp. 95-104 (http://issuu.com/naokonishimoto/docs/musashino2013_nb)。
- 西本直子「旧西本組本社ビルの建造年代について」日本建築学会2013年大会講演梗概集F分冊、pp. 921-922。
- 西本直子「半世紀前のビルをアートスペースに」、住む。第2号、泰文館(平成15[2003]年)、p. 172。
- 文化庁「月刊文化財」454号(2001年)、pp. 40-41。
- 日本建築学会編「新版日本近代建築総覧」技報堂出版(昭和58[1983]年)、p. 341。
- 日本建築学会編「総覧日本の建築第6-II巻、奈良：和歌山」新建築社(平成14[2002]年)、p. 254。
- 浜田拓志「『登録有形文化財・西本ビルの保存とアートによる活用』とその後」和歌山県立近代美術館ニュース第40号(平成16[2004]年3月)、和歌山県立近代美術館、p. 6。
- 文化庁文化財部編「総覧登録有形文化財建造物5000」海路書院(平成17[2005]年)、pp. 119, 270。
- 本多友常・平田隆行・鳴海祥博・中西重裕「建築風土記11：まちづくりの核となる建築保存を市民の手で」建築ジャーナル第1093号(平成17[2005]年11月)、企業組合建築ジャーナル、pp. 50-53(特にp. 53)。
- 松尾寛「旧西本組本社ビル：天空の眼vol. 3」ニュース和歌山(平成25[2013]年10月9日)。
- 松尾寛「建物語・人物語」：①旧西本組本社ビル『場が放つ独特な存在感』ニュース和歌山(平成25[2013]年1月9日)。
- 松尾寛・森馬康子、他「近代建築プロデュース」銀聲舎出版会(平成21[2009]年)。
- 三井建設株式会社編纂室「三井建設社史」三井建設株式会社(平成5[1993]年)。

村松貞次郎「鉄筋コンクリート構造の歴史（第2回）—RC建築の発達—」コンクリート・ジャーナルVol.6、No.11（昭和43〔1968〕年）。

山崎霞舟「和歌山縣人材録 前編」和歌山日日新聞社印刷部（大正9〔1920〕年）、pp. 223-224。

和歌山県教育委員会編「和歌山県の近代化遺産：和歌山県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書」和歌山県教育委員会（平成19〔2007〕年）、口絵、pp. 204-205, 246。

和歌山県建築士会「和歌山県庁本館：歴史と文化のラビリンス～迷宮～」(和歌山県建築士会、平成24〔2012〕年)。

和歌山県建築士会HP：旧西本組本社ビル (http://www.wakayama-aba.jp/isan_meguri/1197.html、閲覧：平成25〔2013〕年10月31日)。

執筆者不詳「栄光は輝く」社会画報第15号特別号（大正14〔1925〕年）、社会画報社、p. 3。

執筆者不詳「西本ビル再生プロジェクト：ドミニック・エザール展」新建築第78巻第10号（平成15〔2003〕年10月）、新建築社、p. 53。

執筆者不詳「Onomachi a」和歌山カフェ Style（平成25〔2013〕年）、和歌山リビング新聞社、p. 14。

追記：校正の段階で三井建設神戸営業所に一部、西本組の工事経歴書が伝えられていることが判明した。明治23(1890)年竣工の友ヶ島第一砲台建設工事に関わっていたことが特に注目される。平成17(2005)年4月20日付の、鬼澤正氏から西本和子氏に送られた書簡に同封されたコピーを図15として添付する。鬼澤正氏に心から感謝申し上げる。

山生橋梁、大正13(1924)年：土木学会選奨土木遺産、平成24(2012)年千葉県鴨川市、鉄道橋では日本初のRC造T型梁形式の橋梁を施工していることも判明した。今後、詳細に関して調査をおこないたい。

(正 本)									
名	手	竣	工	所	工	名	額	契	約
明治二十二年九月	明治二十三年五月	兵庫県	淡路友ヶ島第一砲台建設工事	五〇千円	陸軍省				
自明治二十四年四月 至明治二十八年三月	明治二十九年十月	福岡県	築豊線第四工区、飯塚白井間線路新設、長崎線第二及第八工区線路新設土工並縫道工事	一一〇	九州鉄道株式会社				
明治二十九年十一月	同三十年九月	大阪府 和歌山県	尾崎和歌山間線路新設土工及縫道其他工事	一六〇	南海鉄道株式会社				
同三十一年五月	同三十二年十一月	山口県 広島県	山陽線第二十二及第二十三工区線路新設土工及縫道其他工事	一五〇	山陽鉄道株式会社				
同三十一年十一月	同三十年十月	和歌山県	和歌山県線名倉妙寺間線路新設土工其他工事	一〇〇	紀和鉄道株式会社				
明治三十二年七月	同三十三年六月	大分県	宇ノ島港新設工事	五〇	大分県				
同三十三年一月	同三十年十月	福岡県	長尾線飯塚長尾間及小倉裏線土工其他新設工事	五〇	九州鉄道株式会社				
同三十四年五月	同三十五年二月	広島県	呉線第五及第六工区線路新設土工並縫道其他工事	二〇〇	鉄道省				
同	右同三十四年十二月	和歌山県	紀ノ川橋梁新設工事	一五〇	南海鉄道株式会社				
同三十七年四月	同三十八年十二月	朝鮮	克義線龜山切取工事	七〇	総督府				
同三十八年六月	同三十九年十二月	和歌山県	日高川水力発電所水路新設工事	六五	和歌山水力電気株式会社				
同四十二年四月	同四十四年十二月	滋賀県	第二湖水古閑段道掘鑿工事	三〇〇	京都市				

図15：三井建設神戸営業所で見つけた西本組工事経歴書部分。